

第165回くらしの植物苑観察会 2012年12月15日(土)

- 「サザンカの品種とその文化史」 -

箱田 直紀 (日本ツバキ協会会長 恵泉女学園大学名誉教授)

サザンカはツバキやチャノキなどとともにツバキ科ツバキ属に分類されます。庭や公園に植えられたサザンカには紅や桃色の花があり、八重や千重咲きなどの賑やかなものがたくさんありますが、これら園芸種のもとになった野生のサザンカは6~7弁の白花で、10月から12月にかけて九州や四国などの常緑樹林や古い屋敷林の中などでひっそりと咲き続けています。



野生のサザンカ

1. 園芸品種の名前と歴史

サザンカが観賞用に庭に植えられるようになったのは、今から400年以上も前の江戸時代はじめ頃と考えられています。江戸時代の前半には名前がつけられたものだけでも100を超える品種が園芸書にあらわれ、江戸時代を通して盛衰をくりかえしながら全国に広まっていったようです。江戸時代の後半や明治以降に選出された品種の多くが、それぞれ優雅な名前(品種名)がつけられて現代まで引き継がれています。サザンカやツバキの古い品種名にはその発達が江戸時代以降であるにもかかわらず、平安時代や鎌倉期の和歌の世界からの引用が多いようです。それぞれの花にはそれぞれの歴史がありますから、つけられた優雅な名前をたよりにその花に刻まれた先人たちの心の内にまで想いを馳せてみてください。

2. 新しい現代のサザンカ

ところで、同じ仲間のツバキ(ヤブツバキやユキツバキ)が冬から春にかけて咲き、花形や花色ともに多彩で華やかであるのに対し、サザンカは冬枯れの庭の彩りとしては貴重な花木とされながらも、常に華やかなツバキの裏方、あるいは添えものとして扱われてきました。

その理由は、サザンカが咲くのが、昔風にいうと人々が冬籠りに向かう寂しい時期で、しかも花がより繊細で散りやすく、木枯らしの中でははらはらと散るといった風情がイメージとされてきたためでしょう。



勘次郎

しかし、最近ではサザンカの位置づけが少しずつ変化してきました。それは、本来のサザンカは一重の花が中心で、花の時期からいうと10月から12月までで咲き終わる、晩秋から初冬にかけての花でした。ところが、1960年前後からやや遅咲きで、花が八重となった華やかな新品種が次々とあらわれ、大量

に増殖されて全国に広まりました。そのため、私たちのまわりには、鮮やかな紅花や八重咲きで華やかなサザンカが冬を通して咲き続けるようになりました。

冬枯れの寂しい生垣や庭の片隅でひっそりと咲き、人知れずはらはらと花びらを散らす寂しいサザンカのイメージが徐々に変化してきて、冬枯れの庭にもう一度賑やかさを取り戻すための華やかな花として定着しつつあるようです。



昭和の栄

今回の観察会では、はじめにサザンカが園芸植物として発達してきた経過と多彩なサザンカの全体像をスライドで観ていただき、その知識をもとに鉢植えにされた品種のひとつひとつがもつ特徴や品種名がもつ意味まで意識していただこうと考えています。



左上：日の出富士                      右：七福神  
左下：宝合（たからあわせ）

.....  
**次回予告** 第166回くらしの植物苑観察会    2012年1月26日（土）  
「都のなかの安らぎ空間」 林部 均（国立歴史民俗博物館 考古研究系）  
13：30～15：30（予定） 苑内休憩所集合 申込不要